
俺は親友の嫁に恋をする

はら まき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は親友の嫁に恋をする

【Nコード】

N7025T

【作者名】

はら まき

【あらすじ】

はまじまじつた
浜島耕太。通称ハマジ。身長158cm、体重92kg。オタク上等上等！俺は彼女居ない歴〃年齢。王道の独身貴族様だ！——ところで俺、今恋してます。（一話ずつ独立した読み切りの短編集です）

俺は親友の嫁に恋をする

俺、はまじまこうた浜島耕太。通称ハマジ。身長158cm、体重92kg。
地元の大学院卒。上場企業情報課勤務。勤続4年目。ボーナスある
し安定した給料にウハウハだ。

趣味は漫画とゲームとプラモとMMO。ガンダム、聖闘士星矢、
仮面ライダー、ゲーセン巡りにガチャガチャ、カードゲームなどな
ど。

人には「多趣味」と言っている。

オタク上等上等！俺は彼女居ない歴〃年齢。王道の独身貴族様だ
！文句あつか！

——ところで俺、今恋してます。

「よーお ハマジ！ 今度の土曜日昼、一緒にラーメン屋行こうぜ
！たまき環がさ、ハマジに美味しい豚骨食わせてやるって意気込んでんだ
よ。ともや環と友也も一緒だからさ、ウルセエと思うけど良いか？」

高校時代からの親友、あやくら宗二朝倉宗二からの電話に俺は意気揚々と返事を
した。

「お、良いぜ！楽しみだな。友也デカくなったか？」

「おうーもうすぐ三歳だぜーはえーよお」

「楽しみにしてる。待ち合わせはどするよ？」

「11時半くらいに現地集合な。場所は——」

宗二が教えてくれた場所をすぐにネットで検索する。

「ああ、今Googleマップ見てる。ああ——ここか。いや、行ったことないな。へえ美味しいのか。おうー場所分かったし、じゃー土曜日にな。環さんによろしくー！じゃー！」

電話を切るときに、さりげなく出した名前——環さん——親友の嫁さん。

——俺、この人に恋してもう6年になります。

俺と朝倉宗二の出会いとは高校2年の頃。

むさ苦しい男子校の中でぽっちゃりを通り越してデブの俺と、背が高くてガッチリ体型で女嫌いの宗二とは趣味がバッチリぴたり合っつてすぐに意気投合した。

学校帰りにはゲーセン行って、家ではだべりながら漫画読んで、ゲームで対戦して。
呆れるほど一緒に遊びまくった仲だ。

それも進路が分かれることで、会えなくなる日が多くなった。

母子家庭の次男で育った宗二は、高校卒業したら地元の2年制の情報処理専門学校に進んだ。

宗二は家の事とか話さないから事情は知らない。俺も聞かない。

俺は実家から通える地元の4年大学に進んだ。

俺の親父は公務員、母親はパート。母方の祖母と俺の4人暮らし。親父が一発奮起で購入した一戸建ての家は、高校に入るときに建てた新築。

一人っ子の俺は蝶よ花よと愛されて、デブにデブに育っていったこ

の逞しい体格。溺愛の印が飯飯飯。

俺は養豚場の豚並に愛でられて、子供の頃からまるまるとしたフクヨカ体型だった。

ちなみに一度も痩せたことはない。もうさ、体内脂肪が決まってんだよ。もう無理無理アキラメロン。

そんなわけで進路が別れた俺たちだったが、頻繁に連絡は取り合っていて、休みの度にだべりながら家で漫画と格ゲー対戦にはあまり変わりがなかった。

時々ゲーセンにも行ったが、宗二が「進学に金使ったからな」と少し渋るから、頻度はかなり少なくなった。

20歳になって、宗二が中小企業の通販部門に就職した。

「毎日毎日、商品をダンボールに突っ込んで伝票貼って、ルーチンワークつまんねえよ」とぼやきながらも、男ばかりの倉庫みたいな職場で、手取り17万3千530円で頑張って働いていた。

俺は大学三回生になって、変わらない日々。

女の影も形もなく、この世に女なんて生き物は幻で、願望世界の空想上の産物だと思うようになっていた。

そんなある日、宗二が電話で珍しく仕事仲間の愚痴をこぼした。

「なーもー ハマジ聞いてくれよ。今度新しいバイトが2人、入るらしいんだ。それがさ、両方女なんだってよ。あーもう 勘弁してくれよ」

女嫌いの宗二らしい悩み。女のどこが嫌いなのか、突き詰めて話したことはなかったから、聞いてみることにした。

「えー出会いじゃん出会い！ お前なんで女嫌いなわけ？ 何トラウマ持ち？」

「ちげーよ。トラウマとかねえけど……なんかメンドくせえじゃん。デート？ 食事？ ホテル代？ 俺金ねえし、女に金つぎ込んで、時間拘束されんなんで、マジ勘弁」

宗二は漫画もゲームも中古が主だった。中古で買って中古に流す。もしくは借りる。奴は女って存在に対価を見いだせないらしい。ま、俺も女の価値って分かんねえんだけど。どれだけ金も時間も全てをつぎ込んでみても惜しくない女が居ればねえ？

俺の嫁はパソコンのディスプレイから出てこないシャイな奴だから仕方ない。総プレイ時間が560時間を超えたギャルゲーも、リアル女に束縛される時間に比べたら微々たるもんかもしれないな。

俺は自由だ！！自由なんだ！！

しばらくしたら、俺は自由じゃなくて、孤独だって事に気がついた。気が付きたくなかったです。なんか、色々ごめんなさい。父ちゃん母ちゃん婆ちゃん、マジでごめんなさい。

宗二が「女のバイトが来る」とボヤいてから2ヶ月が経った。

俺はその話はすっかり忘れていて、追われていたレポートの提出が終わってほっとひと息したところだった。

その間宗二から電話はなかったし、俺も電話はしなかった。俺達はゆるい友達付き合いを続けてたんだ。俺は久しぶりに宗二に電話した。

「もしもしー？ 宗二？ 暇？」

「おー暇だぜー」

「俺んち来いよ！ 俺ね、仮面ライダーのベルト買ったよ？ 3万円でしたグフフ」

「あはは！ マジかよーバカス！！ 見たい見たい！」

「おー待ってるぜー」

「13時くらいに行くわー コンビニで弁当買っていく。お前の分は？」

「いらねえー母ちゃんが作ってるし」

「オーケーオーケー じゃあ 後でなあ」

電話を切って、朝届いたばかりのアマゾンの箱を開ける。光り輝く変身ベルト！ 男のロマン。

カードを横から挿し込むと、中央のアタッチメントが外れたり、ぐるぐる回ったりするんだ。

お子ちゃまには勿体無い本物仕様。大きい友達専用さ。

「母ちゃんー電池ない？ 単4電池2本欲しいー」

「電話台の引き出しにないかしら？ そこになかったらないわ」

電池はなかった。宗二はコンビニに行く行っていたから買ってきてもらおうと思ったけど、コンビニの電池は意外と高い。

すぐに返す金でも、宗二の軽い財布には負担だったら困る。俺は電池を諦めた。今日のところは、な！

「電池なかったー。そうそう、母ちゃん、昼過ぎに宗二が来るから」
「あら、ご飯は？」

「宗二は弁当買ってくるって」

「別にうちで食べていいのにね。用意するのに」

「いや、あいつはそういうの嫌いだから」

宗二は絶対に俺の家の飯を食わない。借りを作るのが嫌なのかもしれないと、薄々感じてはいる。

だから俺も無理強いはいしない。あいつはそういう奴なんだ。親に甘えきって生きてる俺と、なんか知らないけど色々黙って抱えて生きてる宗二は、違うのかもしれない。

でも俺はあいつが好きだ。あ、俺ホモじゃないですから。

「このエビフライのエビちっせえー」

宗二はコンビ弁当のエビフライに文句を言いながら、ごまが付いた飯を口に放り込む。宗二は早食いだ。

ものの5分もあればさつさと完食して、お茶を飲んでゴロつと横になる。

久しぶりに会った宗二はむさ苦しさはそのままに、髪の毛もヒゲも伸び放題で、髪の毛なんか肩まで付いてる。

「ベルトなー電池ないから音でねえ」

「マジか、言えば買ってきたのに」

「電話切って気が付いたんだよ」

「ははーバカス！」

宗二は変身ベルトを手にとって腰に当て、「ポーズどうだっけ?」
と言いながらふざける。

俺も俺で「ちげーよ、もっとうなー腰入れてなー」と指導する。
楽しいが正直キモイと思う。

電池がないから音が出ないし、変身ベルトの話はそこそこにして箱に仕舞った。

「宗二、仕事どうよ？」

「あー新しく入ったバイト？」

そこで初めて女のバイトが入る話を思い出した。

「そういえば女のバイトが入るって言ってなかったっけ？」

「あー1人は1日で辞めた。なんか倉庫から出ないし、周りヒゲのオッサンばかりだし」

「じゃあもう1人の子は？」

「まだ続けてるよ」

「へー根性あるじゃん。いい子？」

「う、うん……なんつか……うん、いい子だと思う」

なにやら歯切れの悪い宗二に、俺はピーンときたね！ なになに？

恋？ 恋ですか？

俺はニヤニヤしながら宗二に詰め寄った。たぶん相当キモイ顔になつてたと思う。宗二が後ろに引いた。

「どんな子よ」

「変な子」

「顔は？」

「普通かな」

「体型は？」

「普通かな」

「年は？」

「2個下」

「性格は？」

「変」

なんだよ、ぜんぜん分かんねえよ。もっと具体的に言えよ！ と思

つたらそれが口から出ていた。
宗二は困ったように頭を掻きながら、少しその子の事を教えてくれた。

「倉庫にゴキブリが出たんだよ。そしたらさ、足でグシュって踏み潰してた。で、飯時に言うんだぜ、ゴキブリって頭が取れても生きてるんですよ。ちゃんと潰さないって」

「オイオイ、ヘビーな女だな」

「おう、他の社員ドン引き。で、俺が昔、市営住宅に住んでた時に、ゴキブリに指齧られたって話したらすげー食いついてくんの。なんか仕事終わって一緒に駅まで、ゴキブリの話しながら帰った……」

なんか話の方向が違ってきた。

「へ？ マジで？ 何それ 一緒に帰っちゃってるの」

「うん。でも話題がゴキブリ。白い壁にチャバナとかマジ戦慄ですよーとか言ってくる、その子」

「なんつーか、色気がねーな」

女子としてそれはどうよ？

「うん……で、今 幽 遊 白書の新装版貸してる」

「は？ 漫画貸し借りしてんの？」

「うん。本屋に行くって言ったら付いてきて、幽白買ったら一巻から貸してくれて。読み返したいって言われてさ」

「で、貸したわけだ」

「うん」

それってさ」。

「まじかよー なに 付き合っちゃうの？」

「いや、そういう話しはしたことない。ゴキブリと漫画の話しかしてない。でも一緒に満喫行っただけ」

「へ？」

「オイオイオイ、それってデートだろ？」

「それってデート？」

「わかんねえーあー俺あの子の考えてる事、ぜんっぜん分かんねえ！ だってよ、俺の隣で寄生獣とか読んでるんだぜ？ 色気ねえよ。それに全部割り勘。満喫での会話ナッシング。ああー、ドリンク何飲みます？ くらいは会話したけど」

「絶対デートだろ」

「お前、会話がねえのがデートって言えんのかよ？」

「うーん……ってか宗二、その格好でその子と一緒に満喫行っただけ？」

「正直小奇麗とは言いがたい格好の宗二。せめて髪の毛は切ったほうが良いと思う。もうすぐ夏だし。」

「うん、俺床屋嫌いなんだよ。会話とかダリイし……」

「知ってるけどよ。お前一応社会人だし」

「俺、倉庫から出ないから」

「宗二は基本的にものぐさだ。金を使いたくないから床屋に行かないのかと思ったこともあったが、人との会話が心底おっくうらしい。」

「その子お前のこと好きなのかな？」

「それはないだろ。結構可愛い子だし」

おい、最初に聞いたことと違うぞ。お前、普通って言わなかったか？

「じゃ、お前はその子のこと好きなのか？」

「わかんねえーでも、なんか……うん、めんどくさいとは………思わない、かも」

いつもと違う宗二に、俺は何故か焦った。焦ってしまったんだ――

宗二の職場は県庁所在地のでかい駅が最寄り。そこから徒歩で20分らしい。

毎日家から30分電車にゆられて、徒歩で20分歩く。宗二は運動しなくても通勤が運動になってるのか、健康的だった。

ただボサボサ頭と無精ヒゲだけど。

夏になってセミがウザイくらいに鳴きわめいて、俺はうんざりしながら課題に必要な本を借りに県営図書館に向かったんだ。

県庁の隣にある図書館に、俺は宗二が通勤に使っている電車に揺られて行った。

図書館を出る頃には18時15分くらいで、たぶん宗二も仕事は終わっているはず。

近くに居るなら、飯でも誘おうかなと思って駅まで歩きながら、俺は宗二に電話を掛けた。

「お、ハマジ！ どうした？」

「よーお疲れー仕事終わったか？」

「おう、今駅まで歩いてる」

「今から飯どうだ？」

「え、ああ……うん」

歯切れの悪い宗二に、俺は例のバイトの子を思い出した。

「先約あり？」

「あ、うん」

「バイトの子？」

「うん」

「がんばれよ！」

「そんなんじゃないよーよ」

「はは！　じゃ、またな」

俺は電話を切ってパスを出そうと、ケツポケに手を伸ばしてそのまま固まった。

目の前に宗二が居た。

宗二は髪を短く切ってヒゲも綺麗に剃って、見覚えのあるよれたチエツクのシャツだけど、背の高い宗二はなんか普通の人に見えた俺とは違う。

宗二の視線は自分の肩より下に向けられていて、俺の方は向いていない。宗二は俺に気がついていないらしい。宗二の視線の先には、小柄な女の子が居た。

ボブの黒い髪、明らかにユニクロ製のクリームピンクの七分袖のシャツとジーンズ。

肩からは紺色のショルダーバッグを斜めがけして、笑っていた。背も顔も小さくて、宗二がでかいから大人と子供みたいだ。

二人は改札の前を通りすぎて行く。俺は無性に後をつけたい衝動にかられた。

が、ヤメた。ホテルなんか吸込まれた暁には、俺はLANケーブルで首をつるかもしれん。

帰りの電車でぼんやりとさっきの女の子を思い出していた。

「ちいせえ……」

俺がな。俺、でかいのは体型だけだったみたいだ。

宗二が女の子を居るのを目撃した次の日曜日、宗二から電話が掛かってきた。ハッキリ言って珍しい。

「もしもしー ハマジ？ 暇？」

「ん、ねんどろいどの通販が俺を呼んでいるが、貴様を優先してやるっ」

「あはは、サンキュ お前ん家行っていー？」

「おー来いよー」

「んじゃ、今から行くわ」

俺は手に持っていたねんどろいどを机に置いた。

なんちゃら募金のおまけという名目で手に入れたねんどろいどは、思いの外細かく出来ていて、塗も良い。好みだ。

ちよっとシリーズ揃えようかと思ってネットで検索してしまう。

あーねんどろいどは仲間を呼ぶんだよ！！ 1人じゃ寂しいってな！ ああ、俺も寂しいよ！

購入ボタンを押そうか押すまいか迷っていると、宗二が来た。俺は購入を延期して玄関に向かう。

「ちーっす」

「ハマジさん、ちーっす」

宗二はコンビニの袋を下げて家に入ってきた。ヒゲは少し伸びていたが、さっぱりと髪の毛は切つてある。

やっぱりあの日駅で見たのは宗二で間違いないと確信した。

「さっぱりしたな髪」

「暑かったから、さすがに」

「どうようだよ？ その後は」

「へ？」

「バイトの子に決まつてんじゃない！ この間どっか行つたのか？」

「いや、どこかつて不動産に」

「はあ？」

何何なんなの？ あんた達同棲するの？ お父さんは許しませんよ

！ 脳内がダダ漏れだった。

「いや、一緒に住まねえし。ぜんぜんちげーし」

「なんだ。で、なんで不動産？」

「バイトの子がさ、引越したいんだって、それで部屋探し付き合つた」

「ふーん？」

普通、職場の男に部屋探し頼むか？ また脳内が漏れた。

「なんか環さん——あ、バイトの子の名前なんだけど、県外出身でさ、まだ18だけど、ちょっと前から家出て、こっち来てるらしい。今は友達とルームシェアしてるらしいんだけど、友達が県外に就職

するんだって。だから一人暮らしするから部屋探してるんだと」

「ふーん……名前呼びっすか」

「知らん、最初に所長が名前呼びしたから、職場全員が名前呼びだ。俺だけじゃねえよ」

宗二は少し不貞腐れているように見えた。

「で、引越し祝い贈りたいんだけど、何がいいかな？」

「へ？ お前ソレを俺に言うわけ？」

「だって俺、女に何か買ったことない」

「馬鹿 俺もねえよ！」

ついでに会話もねえよ！

「で、環さんってどんな子？」

「ん？」

「ほら、趣味とか、好きそうなものとか贈ったほうがいいだろ？」

「ああーうん……漫画？ しか知らん」

「はー 引越し祝に漫画かよ」

「うん、それは流石の俺もないわ」

男2人で頭を抱えた。ねんどろいど贈っとく？ はさすがに言えない。

「環さん、なんか物静かだけど、なんかうん……いい子。なんでもそつなくこなすし、仕事もきっちりしてる。所長も信頼してるぽくて、なんかシヨップのデザイン任せられたりして。年下に見えないんだよなー。苦労人なのかもしれん。環ちゃんじゃなくて、環さんって感じ？」

「ふーん？」

「まあ、平日しか会わないんだけどな」

「俺より会ってるじゃん」

「まあな」

宗二の目は漫画でよく見る恋する男の目だった。ちょっと殴りたくなつた。

結局引越し祝の妙案は出ず、宗二は帰って行つた。次に宗二に会ったら、宗二と環さんは付き合うことになっていた。

俺のねんどろいどは結局一体のままだつた。

「はじめまして、鈴木環です」

「あ、浜島です……ども」

俺、休日に母ちゃんと婆ちゃん以外の女の人と会話したの、小学生以来かもしれん。いや、小学生の頃でも怪しかった。

なぜか目の前に噂の環さんと宗二が居て、俺たちはドトールでお茶してる。

「ハマジは俺の大親友なんだ！ いい奴だよ、丸くて」

「そうなんだーあたしもハマジって呼んでいい？ あたしは環でいいよー」

「あ、はい。どうぞ」

俺、完全に挙動不審です。アイスコーヒーの味も分からん。顔に妙な汗かいている。マジ死ね、俺死ね、汗かくなキモイから！
ハンカチで汗を拭いながら、俺はチラチラと環さんを盗み見た。

小さい環さん。前見かけた頃より髪の毛が少し伸びていて、後ろでちまつと結んでいる。服はやっぱりユニクロで、たぶんこの人ノーマイク。

顔立ちは整っていると思うけど、目は二重じゃないし、となりの席のギリギリした綺麗系のおねーさんとは全然違う。でも可愛かった。笑い方が。

「あはは あたしハマジの年下だし、敬語やめてよ！ あたしとも友達になつてね」

明るくにつこりと笑われて、俺は顔がぼっと赤くなるのを感じながら、ハンカチで汗拭いて誤魔化した。

マジ汗神。汗出てて良かった。でも俺死ね、マジキモイ。

「この間から付き合う事になったから、お知らせつてか、紹介？」

「うん、紹介」

「マジか！ おめでとう宗二！ やったじゃん 初彼女」

「うん、なんかうん。マジで照れる」

「馴れ初めは？」

俺は手をマイクにして環さんに向ける。

「えっ！ 馴れ初め？ うーんゴキブリ？」

「かな？ うん」

ちょー！ この女、喫茶店でゴキブリとか言い出した。店員が睨むのが分かる。営業妨害だ。

「宗二さんとは同じ職場で、共にゴキブリと戦う同志です。あ、殺

虫剤は外道。武器はスリッパか新聞紙オンリー。職場のゴキブリは激減しましたね、マジで」

ちよ！ この女、喫茶店でゴキブリ連発しやがった。マジで店員が睨んでる。営業妨害だ。

「はいはい、環さん、ここお茶するところだから。ミスターG発言はその辺で」

そう言っただけで環さんのゴキブリ連発発言を止めた。さりげなく彼女の頭を撫でてる。

なんだかそれがすごく自然で、当たり前で、空気みたいだった。お似合いのカップルって言うんだろ。俺マジ邪魔じゃね？

「あはは、そうだったそうだった。いやーミスターは縁結びの神ですね、マジで」

この女まだ続ける気だ。

相当変わっている。宗二が「変」と言っていたのも納得かもしれん。

宗二がさりげなく話題を変えた。俺のリュックから飛び出していたiPodを指さす。

「何の曲入ってるの？」

「え、アニソン」

「ですよー」

「えー何のアニソン？」

ちよ！ この女、そこでそれ聞いちゃ駄目だろ。

俺は仕方なく来るときまで聞いていた曲を再生する。知らねえだろ、

深夜アニメだ。

「あー知ってる知ってる！ 魔法少女な！ アレ鬱展開だよー」

「え！？ 知ってるの？」

「当然！ 録画してまつせ」

逆に宗二が知らなかった。宗二はあまりアニメは見ない。

「え、なにに？ 有名なん？」

「鬱展開で有名なアニメ。この曲も鬱シーンになると、ジャジャヤーンってかかるんだよねー」

ちよ！ この女、何気によく分かってんじゃん！ ちょっと話題の共通点が出た。

「他に何観てる？」

「今期はねえ——」

ちよ！ この女、今期とか言いませんでした？ ひょっとしてひよつとすると。

「環さんってオタク？」

「は？ オメエが言うなよ？」

ちよ！ この女、口悪い！ 怖い！ 初対面でオメエって言われた。

「いやん、私腐女子とは絶対違いますからあ！ 男同士の絡みとかマジ無理、キメエ」

ちよ！ この女、キャラ作ってるし。なんか面白いかもしれない。

「いや〜一目で分かったね、ハマジ俺たち同士！ 今期のアニメについて熱く語ろうぜ！」

ちよ！ この女、俺発言。しかも恋人そっちのけで、俺とガッチリ手を組んだ。

宗二はニコニコしながらアイスコーヒーを飲んで、環さんの口にミルフィーユを突っ込んでる。

環さんとのアニメ会話に盛り上がりながら、俺は心の中で宗二に謝った。

——ごめん、宗二。俺、この人好きになったかもしれない。

「ちよ！ ハマジ！ ペイント消えた！ 付けて」

「え？ 俺 装備がターゲット表示してくれるから、ペイント持つてきてない」

「ちつ！ 使えねえ奴！ 宗ちゃん！ よろ！」

「はいはい たまちゃん 付けましたよー」

何故か俺の部屋に環さんがいる。そして宗二も。

三人でモンハンをプレイしながら、環さんはもう何回舌打ちしてるんだろう？

この人ゲーム下手だ——。正直言ったら足手纏いなんだけど、めっちゃくちゃ楽しい。

環さんと宗二と3人でゲームするのはめっちゃ楽しい。

環さんはプラモ山積み、漫画床置、ねんどろいどが机に鎮座している俺の部屋でも文句の一つも言わない。

言ってくるのが「あ！ この漫画貸して」とか「ねんどろいどは仲間呼んじゃうよ？ 寂しいってよ？」とかそんな事は言ってくる。

いつの間にか環さんは宗二を「宗ちゃん」と呼んで、宗二は環さんを「たまちゃん」と呼ぶようになっていた。

俺は変わらず「環さん」。そして環さんは「ハマジ」って呼ぶ。

俺と環さんの距離は近づきも遠くもなりはしなくて、でも確実に宗二と環さんの距離は縮まっていた。

「やったー！ 翼でたー！ これでジャギなんとか装備が作れるー」
「たまちゃん良かったねー」

宗二は環さんの頭を撫でながら、ニコニコしていて、本当に楽しそうだった。

環さんの弱い装備を強化するために、俺たちはレベルを落としたクエストに協力していた。

正直、俺も楽しい。

宗二は俺の前で環さんに触れるのは、頭か手だけ。たまにほっぺをツンツンしてるけれど、それだけ。

きっと2人になったら、あんな事やこんな事や……と妄想するけれど、童貞の俺には霞がかつてるというか、アニメ調になるというか、リアルがない。

宗二と環さんのキスシーンすら想像できない。

なんだかそういうのはこの2人には似合わない——そんな感じ。でもそれは多分俺の願望。環さんが宗二の下で女の声の声を上げるとか、俺の脳は拒否って想像出来ないんだ。

2人が帰った部屋で俺はねんどろいどを眺める。

ほんと、仲間が欲しいか？ 寂しいか？ お前は俺だ——俺と一緒に

に居てくれる人ができたら、仲間買ってやるからさ。

環さんが居るんだ、この世には環さんみたいな女の人他にも居るかもしれないじゃないか！

環さんは宗二の彼女なんだ。俺は俺の彼女を見つける！俺は俄然やる気になった。

とりあえず、環さんの残り香で一発抜いた。

俺が大学4回生になった時、宗二と環さんは付き合って2年になつていた。

環さんは相変わらず変わっていて、時々俺にとんでもないことを言うってくる。

「ハマジはチェリーか？」

「はっ!？」

「いや、ハマジはチェリーか？」

言い直してねえよ。オブラートに包めよ、この女。マジモンのチェリーくん、その発言はないだろ。

「あのですね、環さん。そういうお下劣な発言は、女性がするものじゃないですよ」

暗に、ウルセエ黙れこの女！　と言ってやる。

「そっかー　ハマジはチェリーか。頑張れよ！」

「はい、頑張りますってウルセエ黙れこの女！」

脳内がダダ漏れだった。環さんは気にせず笑っている。気にしろ。

俺のガラスのハートはズタボロだ。俺の肉襦袢はクッション効果はねえんだよ。暑苦しいだけなんだよ。

宗二止める、この女はお前の彼女だろ！？

宗二はニコニコしながら「たまちゃんは毒舌だなあー」なんて言っ
てやる。

こいつ、環さんと付き合うようになって完璧に毒気が抜かれてる。
というか、甘くなった。

近くに居るだけでストロベリーのコチニール色素をまき散らしてる
感じ。あれ、虫だからな、虫！

俺の親友をコチニール色素に変えた女は、俺の心もコチニール色
素に変えようとするからタチが悪い。

何にも考えていないケラケラした笑い声を上げて楽しそうに笑う環
さん。

いつもユニクロ着てる環さん。いつもジーンズの環さん。いつも
同じ靴で同じ靴の環さん。

髪の毛だけが伸びて、柔らかくウェーブして、黒髪なのにキラキラ
してて綺麗だった。

最初は可愛いと思った環さんが、いつの間にか「綺麗」になって、
彼女をそうしたのは宗二だと思うと、俺はすごく羨ましかったんだ。

「会社がM & Aする」

突然一人で訪ねてきた宗二がコチニール色素を真っ黒に染めて、
肩を落として呟いた。

「は？ お前たちが勤めてる会社が？ マジか」

話を聞くとどうやら東京の上場企業に合併されることになったらしい。

それに宗二は買取先の会社に誘われているらしい。もちろん、環さんも。でも環さんは、その日の内に断りを入れたというのだ。

「なんで？ なんで環さん断るの？ 一緒の会社のままで居られるんじゃないの？」

「分かんねえ……確かに東京の会社だとあつちに引越さなきゃなんねえけど、俺それでも良いと思った。給料も上がるし、環もバイトじゃなくて社員になるって。だから正直、環と東京で同棲とかまで考えたのに——」

ここまで落胆している宗二を見たのは初めてかもしれない。宗二はベッドの端に座って頂垂れたまま続ける。

「環、俺と一緒に居たくないって事なのかな——」

「それはないだろ。あんなに仲いいじゃないか。なんか喧嘩したのか？」

「してない。喧嘩とかしたことねえーもん」

だよなー。お前甘だもんな……。

宗二は環さんに遠慮してるんじゃない。宗二は環さんが大事すぎて甘いだけだ。それは見ていてすごく分かる。遠慮とは違う。あれは独占欲の目だ。

「お前聞いた？ 環さんに、なんで断ったのかって」

「聞いたよ。東京行きたくないって言われた」

「そんだけ？」

「うん　そんだけ……マジ分かんねえ」

お前に分かんねえ事なんか、俺も分かんねえよ。宗二は環さんが好きで、環さんは宗二が好きなんじゃないのか？

「じゃ、お前どうするんだよ。東京行くのか？　一人で」

「行きたくない、俺は環と一緒にがいい」

「辞めんのか？　仕事——」

「再就職か——」

「環さんはどうするか言つてたか？」

「聞いてない。そこまでは」

「んーまあ、環さんバイトなんだろ？　社員つてのが嫌だったのかな？」

「分かんねえ。あ——もう分かんねえ！　環が何考えてるのか分かんねえ！」

聞けよ。なら。分かんねえなら分かるまで聞けよ。逃げんなよ！

諦めんなよ！　好きなんだろ？　環さんが好きなんだろ？　なら諦めんなよ！

俺の脳内はまたもやダダ漏れだった。宗二はポカンと口を開けて俺を見ていた。

「そうだな——ハマジの言つとおりだ。聞かなきゃな……環に」

宗二は「ありがとな」と言つて帰つていった。そのまま環さんの家に行くのかもしれない。

あーあ。俺の脳内は俺を励ましてただけだな。諦めんな、逃げんな、環さんが好きなんだろ？　なあ、俺——。

それから一ヶ月近く、宗二から連絡はなかった。

俺は環さんのメアドも電話番号も知らないから、必然的に環さんとも会わなかった。

その時、気が付いちゃったんだよね。俺と環さんは宗二が居なきゃ会うこともないんだって。

結局、宗二は東京に行く話を断った。そして奴は起業した。

元居た会社と同じ通販の会社を起こして、環さんがデザインとかで手伝って、2人で二人三脚よろしく頑張る事になったらしい。

宗二は人が変わったように働いた。ビシッとスーツ着て、取引先に挨拶回りしてるのを何度も見かけた。環さんは相変わらず変だったけど、ケラケラ笑って、でも綺麗だった。

2人は同じ会社で頑張ってるのに、同棲とかはしなくて、その代わりに宗二が家を出た。

新しく部屋を借りたりはせずに、どうやら会社に泊まり込んでいるらしい。

久しぶりに2人で会ったとき、宗二は少し痩せたようだった。

コチニール色素なんかどっか行って、目がギラギラしていて、企業戦士って感じだった。

そして俺は、宗二がいつか身体を壊すんじゃないかと心配になった。

「宗二、お前大丈夫か？　ちゃんと喰ってる？」

「おう、喰ってる」

「寝てる？」

「ばつちり寝てる」

なら何でそんなに変わっちまったんだ？ お前――。

「俺、変わったか？」

「うん、変わった。ゲームもしてない、漫画も読まねえ、元々テレビは見てなかっただろうけど、お前変わりすぎ。息抜きしてるか？」
「息抜き？　してるしてる。環がいる。環が居るだけで、息抜きになる」

それはノロケか？　お前ら何があっただんだ？

「別になんもねええよ」

「へ？」

「いや、ハマジ、脳内ダダ漏れだから」

「あ、マジで？」

「うん」

宗二はクククと笑いながら、頭を掻いた。

環さんと付き合うようになってから、宗二の髪の毛が前みたいにならずに伸びることは一度もない。環さんが宗二を変えた。

「俺は絶対環を嫁にする」

宗二の目は、ギラギラしていて、それは企業戦士なんかじゃなくて、女に執着してるただの男の目だった。

宗二は俺が知っている宗二とどんどん変わっていった。俺は大学院に進学した。俺はちっとも痩せなかった。

環さんと1年ぶりに会った。

相変わらずユニクロ着てて、ジーンズで、靴と靴は前と違ったけれど、ノーメイクで、ケラケラ笑って何も変わっていなかった。

「よーハマジ！ すっごい久しぶりだね！ 元気？」

「おう！ 俺の腹は相変わらずだ」

「ははータプタプーぷにぷにー 内蔵悪くすんなよ」

初めて環さんから俺の身体を気遣う言葉が出た。脳内メモリーに保存した。

スーツを着た宗二はすっごい上機嫌で、気味が悪かった。くたびれたチエックのシャツを来ていた宗二は何処へ行ったのか？

「委託してる倉庫に挨拶に行った帰りなんだよ、スーツなのは」

どうやら俺の脳内はまたダダ漏れだったらしい。コエーな俺。

「で？ 今日は何の話？」

そう、俺は2人に話があると呼び出されて、駅前の焼肉店に来ていたんだ。

「結婚する」

「は？」

「俺たち、結婚するから！」

「え？ マジで？」

「うん」

すんげー笑顔の環さんが信じられないくらい眩しくて、俺は気を失

うかと思った。

「お、おめでとう。なんか信じられん」

「おー俺も頭どころかなりそうだった。環の親父さんマジ怖えーのな」

「親も挨拶済か？」

「おー先週末行ってきた。頭下げてきた」

「良かったな。うまくいった」

「いやーうまくいったのかは……微妙」

さつきまでニコニコだった宗二も環さんも少し暗い顔になった。

「え？ 何？ 反対とかされたわけ？」

「いや、反対も賛成もされてない。勝手にしろって言われた」

「は？ 何それ」

環さんは困ったような笑顔で「関心がないだけだよ」と笑った。

「だから結婚式はしない。写真だけ撮るんだ」

「そう——なのか……まあ、結婚ってなると、色々あんだろうな」

「まあな」

「飲めよ！ 祝だ！ 俺がおこる！！」

「学生に奢られたくないですー。ハマジが就職したらおごってもら
うね」

環さんの一声で、俺の初おごりはなくなった。

環さん、環さん、俺、あなたが好きでした。今でも好きです。幸せになってください。たぶん、宗二はあなたしか見ない。

俺は失恋したんだろうが、そんな実感は全くなかった。俺の恋は

そのままに、想い人の環さんは俺の親友の嫁になった。

「ハマジ！　ここ！　ここ！」
「ちゃまじー」

宗二が大きく手を振って、宗二と手を繋いだ2歳の友也が舌っ足らずな声で俺を呼ぶ。

環さんはママチャリを駐輪場に止めながら、ちらつと俺の方に目を向けて笑った。

環さんは子供を産んでも相変わらず変で、ユニクロ着てて、ジーンズで、綺麗だった。

結婚を報告してくれた年、宗二と環さんは入籍した日に写真を撮った。

2人は本当に結婚式を挙げなかった。写真だけ二人で撮ったらしい。環さんは見せてくれなかったけど、宗二が後でこっそり家に持ってきてくれた。

「おい、お前の写真は？」

「え？　環だけ見ればいいじゃん？　これ全部俺が撮ったんだ」

宗二が持ってきた写真は、環さんしか写っていないものばかりだった。肩が露出した赤いドレスを着た環さんの写真。

俺は初めて環さんの肩を見た。ドレスの色が赤いせいか、真っ白の肌がすべすべで、恐ろしく綺麗だった。

俺は初めて化粧をしている環さんを見た。ケバケバしさはなくて、当たり前のように色づいた頬。ワインレッドの唇が艶やかで似合っていた。

俺は初めて「朝倉 環」になった環さんを見た。写真の中の環さんは、レンズ越しに宗二に向かって笑っていた。

一枚だけ、和装の写真があった。胸から上のアップで、何処を見ているのか横顔だった。

その写真を俺が手にしたとき、宗二が低い声で言った。男の俺でもドキリとする程低い声。

「その写真、やるよ」

「え？」

「環が唯一俺を見てない写真だから、お前にやるよ。他はやらん」

俺はその時、宗二の言葉の意味が分からなかったが、「ありがとう」と言って貰った。

一人になった部屋で、宗二に貰った環さんの写真を眺めた。綺麗な横顔だった。

俺はいつもこの横顔を見つめていた。宗二を見る環さんの横顔を、俺はこの数年見続けた。

でもこの写真に写る環さんの視線の先に、宗二が居ない。宗二はカメラを持っているから――。

『環が唯一俺を見てない写真だから、お前にやるよ』

宗二の声が頭に残った。ああー俺の脳内はずいぶん前からダダ漏れだったんだな。

「ここのラーメン美味しいよ〜あたしは”しっかり”をオススメするね」

「俺は”あっさり”が良いと思う。胃にもたれるぞ」

「ちゃまじー！ だっこしれー」

朝倉家の面々に囲まれながら、俺は膝の上に友也を乗せて、豚骨ラーメンのメニューを見た。
よし！ 決めた。

「俺、あっさりにチャーシュートッピングするわ、あと卵も」

「ハマジ、身体に悪いよ？」

「お前のトッピングは全部 友也が回収してやるから安心しろ」

「マジか！ 友也！ 俺のチャーシューを狙ってるのか」

「ちょーらい ちょーらい」

「こーらっ！ 友は人の物を欲しがらないのっ」

環さんは相変わらず変で、ユニクロ着てて、ジーンズで。暖かい眼差しを友也に向ける。

母親になった環さんは、宗二だけを見ていたあの頃の環さんとはちよつと違う。

それにしてもボロい店だ。

「こーゆー店が美味いんだよ！ ゴキブリが出ない店に美味しいものないね！」

ちょ！ この女、飲食店でゴキブリとか言い出した。店員が睨むのが分かる。営業妨害だ。

「この床のヌルヌルがさ、もうゴキブリが寄ってくるほど美味い脂って事なんだよ！」

ちょ！ この女、飲食店でゴキブリ連発しやがった。マジで店員が睨んでる。営業妨害だ。

「はいはい、環、ここ飯喰うところだから。ミスターG発言はその辺で」

「あはは、そうだったそうだった。いやーミスターは縁結びの神だからさ、うちの」

相変わらずの環さん。ちょっと変な環さん。宗二を変えた環さん。俺、環さんが好きです。

「ん？」

環さんが俺を正面から見た。ああ、きつとまた俺の脳内はダダ漏れなんだろうなと思いつつながら、俺は出てきたラーメンをすすった。うまかった。また太るなこりゃ。ね、環さん。

<了>

あたしを呼ぶ声をする

「環さん、ちょっといいですか？」
たまき

朝10時の始業からすぐにあたしを呼ぶのは、梱包担当責任者の
あさくひ
朝倉さん。

「はい、なんででしょう？」

ロッカーに鞆を突っ込んでいたあたしは、少し後ろを振り返る。
朝倉さんのヒゲは、確か初日に会った時には剃ってあったけど、それ以降に剃られたのを見た事がない気がする。

肩まで伸びた髪はいかにも「切らなかつたから伸びました」って感じで、ハッキリ言っただけで似合っていないし、暑苦しい。

「髪、切れよ」

聞こえないようにボソツとつぶやいてみる。当然返事は聞こえない。

「あの、新しい商品が入荷したので、撮影会を兼ねて説明がありますんで」

「あ、はい。分かりました。すぐに行きます」

あたし、すすきたまき鈴木環は2週間前からこの職場にバイトに入った。

仕事は通販の梱包作業。商品に囲まれた倉庫みたいな場所で、いや倉庫だなココは、延々と梱包作業をする。

ハッキリ言っただけでルーチンワークで超暇。できない奴はいない、代わりはいくらでも居る仕事。

あたしは仕事にやり甲斐なんか求めていない。求めているのはお金

と健全に暇をつぶす作業。

でもこの職場は超魅力的。何がって？　なんと昼ごはんにお弁当が支給されまーす！

所長が店屋物でも、テイクアウトでも、コンビニ弁当でも用意してくれるスンバラシイ職場。

時給1050円、交通費上限あり支給、県庁駅から徒歩20分。

通販の梱包作業で誰にでも出来る簡単なお仕事です。

男性が多い職場ですがみんな和気あいあいとやっています。

昼ごはん支給します。

そう書かれた求人雑誌に書かれた案内を見るなり、その日の内に面接希望の電話をした。

「昼ごはん支給します」その一句に釣られて、あたしはこの男性ばかりの職場に飛び込んだ。

採用されたのはあたしともう1人の女の子の2人。たぶんあたしより年上のその子は、1日で辞めた。

「ねえー鈴木さんーあなたココ続けるの？　私は無理だなあー男性ばかりってあんなイモばかりじゃ男に入らないわよ」

「はあ……あたしは男じゃなくて昼ごはんに釣られて来たんで続けますよ、じゃ、サヨナラ」

1日で辞めたその子との会話はそれだけ。男が目当てか、飯が目当てか。

どっちもどっちだね。

「えー今日入った商品は！ な・ん・と！ 飲むだけで痩せる アミノ酸サプリとんでもEXです」

所長が新商品を紹介すると、パチパチと乾いた拍手が響く。以下延々と「飲むだけで痩せる アミノ酸サプリとんでもEX」の紹介。

成分とか、服用方法とか、効率よく痩せる為にはちよつと運動も取り入れた方がいいとかそんな話。

「おい、飲むだけちゃうやんけ」

聞こえないようにボソツとつぶやいてみる。当然返事は聞こえない。

この倉庫に置いてある商品はハッキリ言つて怪しい。

「飲むだけで痩せる アミノ酸サプリとんでもEX」だけじゃなくて、「揉むだけで痩せる アンデスの岩塩」とか、

「超たんぽ茶」とか……おい！ 開発責任者出せ！ このネーミングは誰が考えた！ とツツコミたくなるような代物ばかり。

アミノ酸系サプリだけでも数種類はあるし、コエンザイムとかコラーゲンとか類似品が沢山ある。

だから商品を間違えないようにするために、こつやつて新商品が入ると所長がみんなに紹介するわけ。

ぶつちやけ、注文したお客さんもわかんねーんじゃないの？

他のアミノ酸サプリ頼んで、「アミノ酸サプリとんでもEX」が来ても。

お、これ成分が「アミノ酸サプリ一日二回のつぶつぶ」とそっくりじゃん。

成分表の最初の3つ一緒じゃん。あ、保存料が違うわ。ってソレく

らの違いだよ？ お前ら痩せたかったら運動しろって話。

そんな事を考えてたら、倉庫にゴキブリが出た。

「ギャー！」

男の癖に気持ち悪い声を上げて椅子の上に登ったのが所長。おい
オッサン、あんた40歳近いだろ。情け無い。

ダンボールに沿ってシャカシャカ我が物顔で歩くミスターGに、一
撃を食らわせたのが朝倉さん。

所長のデスクにあった朝刊を丸めて、バシィーンと見事な一刀
！ おお！ やるじゃんヒゲ！

でも惜しい！ 頭部しか潰せていないから、ミスターGの下半身は
ピクピク動いている。

グシュ！ つと踏みつぶしてトドメを差してやった、殺ったぜ。

「た、環さん……靴が……」

流石に朝倉さんも引いたらしい。

へ？ 靴？ 別にいいっすよ、昨日帰宅途中で犬のうんこ踏んだし。
歩いてりゃ取れるし。という脳内はそつと閉まって、

「あー今度はスリッパ持つてきます」

に留めておいた。うん、普通の対応だよな？ ゴキブリにはスリッ
パが最強の武器だろ！？

その日の昼食は所長が店屋物を頼んでくれた。あたしは親子丼に

した。

親子丼をつゆだくで頼んで、スプーンでぐちゃぐちゃに混ぜながら食べていたら、みんなが密かに引いているのが分かる。

この人達は口に出さないだけまだマシだ。どんな食べ方しようが、腹に入れば一緒だろ？ 不快なら見るな。

あたしはお米の一粒一粒までつゆが染みてる方が好きなんだよっ！

話題がゴキブリの話になった。食事中にそんな話題をする不届き者は所長だ。

商品に虫が付くのは良くないから対策を考えようという話らしい。ま、もつともだけど、今する話がコノヤロウ！？

「ゴキブリって頭が取れても生きてるんですよ。ちゃんと潰さない。まずは見つけた奴は徹底的に潰しましょう！ あたし明日スリッパ持ってきますんで。あと粘着タイプの罠も仕掛けましょうよ。ゴキホイホイ」

所長はじめ全員ドン引き。おい！ 所長！ お前が言い出したんだろーがよ？

そしたら朝倉さんがさりげなく助っ人してくれた。

「俺、昔市営住宅に住んでたんですけど、あいつら寝てる俺の指齧ってきましたからね。ダンボールも食べるみたいなので、さつさと潰して全滅させた方がいいですね。商品が食われないうちに」

上手くまとまった。やるじゃんヒゲ。お前とはいい酒が飲めそうだ。あ、あたしまだ未成年だった。

その日の帰り道、ヒゲ、もとい朝倉さんとゴキブリの話で盛り上がりながら、駅まで一緒に帰った。

その時に初めて知ったけど、朝倉さんとあたしは利用沿線が一緒らしい。終業時間が同じなのに、一度も会った事ないぞ？

どうも意図的に避けられていたらしい事を悟った。このヒゲいい度胸じゃねえか。

しかも1個隣の駅だった。朝倉さんが先に降りる。次にあたしが降りる。なんかムカつく。

そんな帰り道が何日か続いた。

「環さん、今日俺本屋に寄るんで……」

寄るからなんなんだよ？ 待つて欲しいのか？ 付いて来て欲しいのか？ 先に帰って欲しいのか？

全然分かんねえよヒゲ！ ハッキリしない男だな……と思いつつ、明るく返す。

「あ、そうなんだ！。あたしも行って良い？ 新刊何が出てるか見たいし」

「え、あ、うん。じゃ、一緒に行こうか」

「うん！」

あたしとヒゲ、もとい朝倉さんは一緒に駅前の大型書店へ向かった。こうして並んで帰るのももう慣れた。

だらしなく伸びた長い髪も、たまに剃られるヒゲも慣れた。そして後ろから冷やかされるのも慣れた。

「おっ！ デートか？ 朝倉頑張れよ！ 2人に春が来たな！」

所長、うるさいです。あの、あたしは今、男と一緒に住んでるんで

すけど？ それにもうすぐ夏だ。春も小春も真冬もないです。

朝倉さんは幽 遊 白書の新装版を買った。知らなかった幽白に新装版が出るなんて！ しかも表紙は全部描きおろした。ぐぬぬぬ……やるな朝倉！ ヒゲの癖にいいチェックしてんじゃないか。

あたしはヒゲにねだって、新装版の1巻から貸してもらった事にした。久しぶりに読みたかったんだよねー！

そして夏が来たら、あたしに春が来た。なんか、めちゃくちゃだけど。

「環——。環。環——ああ、俺もうイク」

勝手にイケ。何処へでも行ってしまう。

ぼけーっと身体を開きながら、同居人もとい家主の顔を見上げる。整った顔だとは思いが好みじゃない。

何よりこの男のあたしを呼ぶ声がム力つく。呼んでるようで呼んでない。

この男との出会いは前のバイト先。

その頃はまだ地元で、午前中から昼過ぎまで個人経営のケーキ屋でバイト、夕方から夜まではチェーンのラーメン屋でバイトしてた。そのラーメン屋で一緒にバイトしてたのがこの男。年はえーって何歳か忘れたけど年上。

朝から晩まで働き続ける16歳のあたしを気遣ってくれていた、悪くなりきれないこの男を、ちょっと利用させて貰うことにした。

あたしは高校を1年で中退した。理由は親父が倒れたから。

当時あたしの家は、左官の父、母、年金受給者で足が不自由な母方の祖母と、あたしの4人で住んでいたけれど、

6つ年上のあたしの姉がふらりと家に帰ってきた。子供2人と借金200万円と一緒に。

そして入院していた母方の祖父の認知症が悪化。母が介護に専念して、献身的に世話をした。そんな矢先に親父が倒れた。脳梗塞。

一気に要介護者が3人に増えた我が家に、お荷物借金持ちの姉とその子供たち。

母はパートに出たけれど、どうやって食べていくのさ？ あたしは親に黙って退学届を出した。

母と姉とあたしが働いて、なんとか生活は持ち直した。かさばる祖父の入院費。助成が出ても足りない。

厄介なのが姉の借金。これは利子がかさんでいく。あたしはバイトを増やした。姉の稼ぎは子供たちの教育費と被服代に消えた。

ボロでもなんでも着せときゃ良いものを、姉は「子供には惨めな思いをさせたくないの」とシオラシイ事を言って身綺麗にしていた。

「たま姉ちゃんーたま姉ちゃん」

姉の子供達があたしを呼ぶ。正直苛々する。お前ら、空気読めよ、な？

1歳でも2歳でも3歳でもさ、お前らは自分以外の人間にも怒りの感情がある事を知れ。知らんならあたしが教えてやる。

な？ あたしは怒ってる。だからお前らはあたしを呼ぶな。

「子供には関係ないじゃないの！」

金切り声で叫ぶ姉の胸ぐらを引っ掴んで、ドスを利かせた声で怒鳴った。

「何歳までが子供か言え！ 16は大人か？ 子供か言え！ お前の借金を誰が代わりに払ってやってるのか言え！！」

泣き崩れる卑怯な姉を蹴飛ばして、18歳になったあたしは姉の借金が完済すると同時に家を出た。手元には現金30万円が残った。

「俺んとこおいで、家賃は要らないし。適当に家事してくれたらいいから」

そう言ったバイト先で知り合った男の家に転がり込んだ。家事の中にはセックスも込み。

でも男は淡泊で、月に1度くらいしか肌は合わせなかった。たぶん、あたしに遠慮してたんだろうと思う。

あたしが転がり込んだ男の家は他県のマンスリーだった。話によると春から就職したけど先に研修が3ヶ月あるらしい。

研修が終わったら勤続先がどこかに決まる。その間このマンスリーを借りているという事らしい。

あたしは梱包のバイトをしながらこの3ヶ月を過ごした。

「環、俺 愛知勤務になったから――… その、一緒に来る？」

「行かない」

「……え？」

「行かない」

3ヶ月世話になった男の問いに素っ気なく返すと、男の顔がくしゃつと歪んだ。

「なんで？」

「行きたくないから」

「愛知に？」

「うん」

別に愛知に行きたくないわけじゃない。呼ばれてないのに行かないよ、あたしはね。君が「来い」って言わないじゃないか。男はそれ以上聞かなかった。ただ「分かった」と言い、後日6月末までここを借りているから、早めに引越してくれと言った。

「朝倉さん、不動産巡り付き合ってくださいませんか？」

「不動産？ 環さん引越すの？」

「はい。ルームシェアしてる友達が他県に勤務になって。だから今度は一人暮らしするんです。通勤に便利な沿線とか教えてください。あたしココに住んでまだ3ヶ月なんです。地元じゃないから分かりなくて」

「ああ、そういう事。いいよ」

時々一緒に満喫に行く仲になったヒゲ、もとい朝倉さんに不動産探しを手伝って貰うことにした。

夏になって、朝倉さんは髪の毛をバツサリと切った。似合ってる。

ヒゲも毎日剃るようになった。本人曰く「暑いです」だって。

うん、うん 分かる！ 今年は特に暑い。私も髪を切った。ボブにしてみた。似合ってる？

朝倉さんと一緒に決めた部屋は今までの沿線と同じで、降りる駅は朝倉さんの前の駅。あたしが先に降りる。次に朝倉さんが降りる。部屋はあたしの駅と、朝倉さんの駅の真ん中あたりで、徒歩で移動する時間を含めると、今までより通勤時間は10分ほど伸びた。

引越しをした次の日曜日、朝倉さんが手伝いに来てくれた。「重たい物あるでしょ？」と言ってくれるので、甘えることにした。確かに机を女1人で組み立てるのは難しかった。説明書には「大人2人で作業して下さい。天板が倒れる可能性があります」と書いてある。

無謀にも1人でチャレンジしてみたけど、やっぱり無理だった。

この引越しの為に新しく家具を揃えた。冷蔵庫に電子レンジ、洗濯機に布団。それから机。机の上にはポケモンを飾りたかった。初代ポケモンのプラ人形を、あたしは151匹全部コンプリートした。それを部屋中の至る所に飾る。

トイレの出窓、キッチンのブラインドの向こう側、玄関の靴箱の上、電気から伸びたスイッチの紐にも括りつけた。

至る所で可愛いポケモンが出迎えてくれる部屋は最高！ ほら、素敵でしょ？

朝倉さんは引越し祝にと言ってケーキを買ってきてくれた。懐かしい甘い匂いに自然と頬が緩んだ。

「ありがとう、朝倉さん」

朝倉さんの目が泳いでいたけど、とりあえず上がってもらってケーキを冷蔵庫に仕舞った。

朝倉さんはテキパキと机を組み立ててくれた。1人で。え？ 説

明書には大人2人でって書いてあるのに。

「ああ、俺でかいから」

「そういうもんですか？」

「結局天板を支えられるか、出来ないかだから、さ」

「そういうもんなんだ」

後は2人でケーキを食べた。甘い苺のショートケーキ。お皿もフオークも出すのが面倒で、そのまままる齧りしたら笑われた。そして告白された。

「環さん、好きです。良かったら付き合ってください」

「は？」

「……すみません……調子に乗りました……」

突然だったから驚いただけで、別にあたしは朝倉さんは嫌いじゃない。

好きかと聞かれたら、ちょっと分からないけど、苦痛じゃないから付き合う事にした。朝倉さんはすごく嬉しそうだった。

変な人。そんな事で喜ぶなんて。

朝倉さんとの会社帰りのデートはもっぱら満喫。

カップルシートに並んで座るのも、もう何回目だろう？ 会話はほとんどない。だって静かにしなきゃね？

オススメの漫画を聞いてそれを読む。逆にオススメしたりする。どんどん共通の話題が増えていった。

朝倉さんと一緒に電車に乗る。朝倉さんはあたしと同じ駅で降り

た。

「間違えちゃったの？」

「まさか！ 送るから降りたんだよ」

「そう、ありがとう」

朝倉さんはあたしを部屋まで送って、そのまま歩いて帰る。時間が無駄じゃない？ って思ったけど、彼と歩いて帰ると時間が早い。楽しいし、あたちちは意外と趣味が合う。あたしはゲーム下手だけど、プレイするのは好きなんだもんね！ もちろん漫画も大好き。

付き合い始めて何週間か経った金曜日、朝倉さんはあたしの部屋に来た。これで部屋に入るのは2回目。そして初めてキスをした。朝倉さんは顔が真っ赤で、しどろもどろに言う。

「俺、女の人と付き合うの初めてだから、そのー」

「は？ 朝倉さんは男の人と付き合っていたの？」

「俺はノーマルです」

「良かった。あたし、ボーイズ・ラブはダメなんだ。特にリアルボーイズ・ラブには耐えられそうにもなくて」

まあ要するに彼が言いたいことは、自分がチェリーくんと言う事。

まあ、誰でも初めてはありますし、あたしはそういうのは気にしない。手取り足取り自分好みに仕上げるリアル育成ゲームが始まった。

朝倉さんはバカじゃない。そこそこのレベルの男子校出身で、女に慣れていないだけ。

本人は女嫌いを自称してるけど、なら何か？ あたしは男か？ この胸はまな板だと言うのか！ だから彼は普通にあたしで勃つ。

本当の女嫌いはね、勃たねえんだよ、分かったか朝倉あ！！

回数を重ねたら順調にキスもセックスもあたし好みになってきた。まだ不器用だけど、あたしはホクホクだった。

「環さん……環さん……」

あたしの上で朝倉さんが呼ぶ。普段の声とちょっと違う。それが最近のお気に入り。

「あさ——」

朝倉さんと呼ぼうとしたら、あたし好みのキスがそれを塞いだ。

「俺は宗二です」

やるじゃん、宗二。今のは超好みだった。

「うん、宗二さん」

呼んだらニツコリ笑われた。うん、今の笑い方も好みだ。うん——
そうか、あたしこの人、好きかもしれない。

夏なのに、あたしに春がきた。なんか、めちゃくちゃだけど。春がきたんだ。

毎週金曜日、宗二さんはあたしの家に泊まった。

「環さん」と呼ぶから、あたしも「宗二さん」と呼ぶようになった

た。

そんな呼び方も板についてきた頃、宗二さんが「親友に紹介したい」と言ってきた。おう、望むところだ。どんとこい。

宗二さんの趣味が合う親友らしい。それならオタクに決まってる。断言できる。

休日のドトールで会った小太りと言うか、巨大な宗二さんの親友「浜島さん、通称ハマジ」は、やっぱりオタクだった。

iPodの中身は全部アニソン。いいね、いいね。いちいちチョイスが渋い。ああーこりゃモテナイオタクの王道チョイスだ。

アニメの話で盛り上がった。うん、さすが宗二さんの親友。少し内向的な所もあるけど、打ち解けたら面白街道まっしぐらだった。

生憎あたしは見た目で人は判断しない。かつこ良くて悪い奴は山ほどいるし、多少ブサでもイイヤツは山ほどいる。ほらね、あたしの宗二さんがそうだよ。

宗二さんは客観的に見たら特にかっこ良くない。初対面の時なんか髪の毛サボサ、ヒゲボーボーの最悪だった。

普通にしたら、普通に見えるかと言うと、オタクのかぐわしい香りがそこはかとなく香る、よれたチェックのシャツが似合うオタク。

まあ、でもあたしにも好みはある。特に髪の毛は切ってもらわないとね。

宗二さんはどんどんあたし好みになっていく。髪の毛は定期的に切るようになったし、ヒゲも毎日剃るようになった。

チェックのシャツから、無地のアースカラーのシャツが多くなった。でも中身はそのまま。

それで良いんだよ、あたしと宗二さんは似てるから。

宗二さんとハマジとあたしの3人で遊ぶ時は、ハマジの家に集まった。ハマジの家は一戸建てで、綺麗だ。でもハマジの部屋は汚い。宗二さんの家には一度も行ったことがない。宗二さんは家に人を呼びたくないらしい。あたしでも。

宗二さんはお母さんと2人暮らしで、お父さんは早くに亡くなららしい。覚えていないと言っていた。

いくつか年上のお兄さんは、大学卒業して他県で一人暮らしをしているらしい。お正月に顔を合わせるだけだと言っていた。

あたしは宗二さんのお母さんにも会ったことがない。宗二さんは「会わなくていいから」と言う。
なんで？ と聞いたら少し困った顔になった。

「俺の母親、かなり病んでるから」

「病気？」

「気がふれててるから——」

「……」

あまり聞かない方がいいかと思ったけれど、そのまま宗二さんは話してくれた。

「親父が死んでから、そのままおかしくなったらしくて。それで変な宗教にガツツリはまっちゃってね。俺の声なんか届きやしないし。兄貴ももう諦めて、さっさと家出るしさ。俺の記憶にはまともな時期の母親が居ないんだよ」

「ふーん」

何と言っても分からないから「ふーん」と言っておいた。他になんて言えばいい？ ありのままの宗二さんがそこに居た。

それで良いじゃないか。大したことないさ。
あたしはガシガシッと宗二さんの頭を撫でた。

「宗ちゃん！　ちゅーしょー！」

「えーちらほらそういう話が出ていたのは知ってると思うけど、3ヶ月後に我が社は東京の会社に合併吸収される事になりました。で、通販事業はそのまま引き継ぎたいと言うことですので、全員社員として東京で雇ってもらえます。環さんも社員になれますよ」

あたしと宗ちゃんが付き合って2年が過ぎた頃、朝礼で所長はニコニコで顔で言った。

まるであたしが当たり前前に東京に行くかの様に話す。いい話だとは思う。給料も上がるらしいし、社員になれる。

でも別に行きたくない――。場所がどうこの問題じゃない。合併先の会社はかなり大きな会社らしい。

社員として東京本社で高校中退があくせく働くのは難易度が高い気がする。ここみたいに小ぢんまりした会社なら良かったんだけど。

あたしは朝礼の内に断りを入れた。

「たまちゃん、なんで？　なんで東京行き断ったの？」

宗ちゃんがものすごく焦った声で聞く。何をそんなに焦っているの？

「え、だって行きたくないから」

「東京に？」

「うん」

「……」

宗ちゃんはものすごくがっかりしているように見える。何を落ち込んでいるの？

「宗ちゃん行きたいなら行ったらいいじゃない？」

「え——…」

「？」

行きたくないの？ 分かんないよ、ハッキリ言えよ。東京に行きたいのか、行きたくないのか、言わなきゃあたし、分かんないよ？

行きたいなら行けばいいじゃん東京。続けたらいいじゃん、仕事。あたしは宗ちゃんが来いって言うなら付いて行くよ？

だって宗ちゃん好きだもん。そしたらあたしは東京で違うバイトする。またケーキ屋さんでも良いな。

それともデザイン系の会社に行こうか？ 宗ちゃんなんて言うかな？

色々帰り道に話そうと思ってたけど、その日の宗ちゃんはひどく無口で、ひどく話しかけにくかった……。

金曜日なのに宗ちゃんはそのまま、帰った。

23時近くなって、宗ちゃんが家に来た。

こんな時間に宗ちゃんが来るなんて初めてで、あたしはシャワー上がりの濡れた髪のまま玄関に飛び出した。

「宗ちゃん！」

「たまちゃん、ごめん。こんな時間に……」

「うつん、いいよ」

「俺、ちゃんとたまちゃんと話したい。東京行きの話」

「あたしも話すつもりだったんだよ……帰り道に——そしたら宗ちゃん、なんか機嫌悪そうなんだもん……」

あたしは気がついたら半泣きになっていた。

「ばかばか。宗ちゃんのばか。なんで帰っちゃうんだよぉ帰っちゃったら話せないじゃないか。金曜日なのに」

宗ちゃんはものすごく慌てて、「ごめん、ごめん」って言いながら、あたし好みのキスでなぐさめてくれた。
その晩、沢山たくさん話をした。

「宗ちゃん、あたしは宗ちゃんが東京に行くって言うなら、止めないよ？ 付いて来いって言うなら行くし」

「え？ そうなの？ だって、東京に行きたくないって……」

「だって、あの会社大きいじゃない？ 大きな会社の社員は嫌なの。あたし高校中退だし、できれば小ぢんまりした所で働きたい」

「だから断ったの？」

「うん」

「なんだ……そうだったんだ……良かった——」

宗ちゃんは何か勘違いしていたっぽい。

「俺、たまちゃんが俺と一緒に東京に行くのが嫌だから断ったのかと思った」

「へ？ なんで？ なんてあたしが宗ちゃんと一緒に行くの嫌なの？」

「いや、遠まわしに別れたいって意味かと思っちゃって——」

「はい？」

ふつつつと怒りが湧いてきた。なんであたしが宗ちゃんと別れた
いつて思うわけ？ 今まで一度もそんな事言ったことないのに！
気がついたら大泣きしながら、宗ちゃんを叩いて罵っていた。

「ばかばかばか！ 思い込みであたしを放置すんな！ わーん こ
んな奴だったなんて！ わーん ばかばか！ アホアホマン！」
「うわ、痛っ！ ひどっ！ 俺はそこまでアホアホマンじゃないで
す！」

「わーん！ アホアホマン！ アホアホマン！ あっち行け！ こ
っち来んな！」
「分かったから、分かったから！ 離れるから！ 殴らないで！
マジ痛い」

宗ちゃんは部屋の隅っこまで離れた。あたしと宗ちゃんの距離が3
メートルくらい開いた。

来んって言われたからって、簡単に離れんなよ、アホ！

「グスン……来んな。アホ。ヒゲの癖に……」

「ええ！？ 何年前の話よそれ！ ちゃんと毎日剃ってるし！ ヒ
ゲ！」

「アホヒゲ！」

「はいはい。アホです。すいません」

宗ちゃんはそのまま、部屋の端っこで体操座りした。ム力つく。
グスン。

しばらくしたら、宗ちゃんが両手を広げて「おいで」って言った。
誰が行ってやるもんか！グスン。

「たまちゃん」

「……」

「たーまちゃん」

なんか猫を呼んでるみたいで嫌だった。グスン。

「環、おいで」

初めて呼び捨てられて、あたしは宗ちゃんの腕に収まった。馬鹿宗二！あたしは呼ばれたらちゃんと行くんだから！

日付が変わったら、宗ちゃんは突然「俺も東京行くのやめる」って言い出した。

え？　なんで？　宗ちゃんにとってはいい話なのに？

「俺、迷ってたけど、起業する」

「は？」

突拍子も無い話だった。宗ちゃんがそんなこと考えてたなんて、あたしは知らない。

「環の才能が生かせる会社作る」

「はい？」

「環、デザイン出来るんだし、環が作るキャラとか可愛いし、そういう会社作る」

「ええ？」

宗ちゃんの話は当たり前にあたしも組み込まれていた。

「最初は通販事業から初めて、資金を大きくしつつ、つてを作る。俺、今の会社で少し取引先との面識もあるし、別に梱包作業以外も出来るし」

「そうかもしれないけど」

「環、知ってる？ 販売ページとかオリジナルキャラとか誰か作れる人居ない？ て探してるメーカーの人も居るんだよ」

「うーん」

「俺が環を売り込むから、環が作ればいいじゃん」

「うーん……」

しかも色々考えているっぽい。どう聞いても、今 急に思いついたわけではない事は分かる。

「いや？ デザイン系で仕事するの嫌？」

「嫌じゃない……むしろやりたい。でも——」

嫌じゃないよ。楽しそう——。

「でも？」

「資金がいる。最初はやっぱり」

「大丈夫、俺、300万ある」

「あたしも300万ある」

「なら足したら600万だから、資本金には十分だ！ あんまり多いと有限会社にできない」

意外と宗ちゃん貯金あった。堅実なのは知ってたけど。

「有限？」

「最初は有限にする。開業2年は納税の免除がある」
「知らなかった」

当時は1円株式会社とかなかったから、有限とか合資があった。宗ちゃんは地味に色々知っていた。

「まあ、俺、いつかは起業するつもりだったから――」

「聞いてないぞ？」

「はは、ごめんな」

何この男。いつから考えてたの？

あたしは宗ちゃんの計画に乗った。一発奮起だったかもしれない。
清水の舞台から飛び降りるってやつ？

最初の1年は通販業務の傍ら、どんどん宗ちゃんは営業をして、デザインの仕事を取ってくるようになった。

あたしはどんどんオリジナルキャラクターを作って、売っていった。
名刺のデザインの依頼を受けた時は刺激的で、初めての紙媒体で面白かった。

宗ちゃんは実家を出て会社に泊まりこむようになった。少し宗ちゃんも痩せた。

さすがに心配になって、あたしは家でお弁当を作って、夜 会社に届けた。毎食コンビニ弁当じゃ身体に良くない。

そしたら宗ちゃんが怒った。なんで――！？

「こんな時間に外に出るな！」

「え……まだ21時だし……」

「だめ！ 何のために環を18時退社にしてるのさ！ 暗くなったら出歩いちゃだめ！ 俺前みたいに送ってやれないんだから」

どうやら、夜は出歩いちゃいけないらしい。あたしは16の頃から22時までバイトしてたからそんな感覚はなかった。

「もー！ 今日はこのままココに泊まりな。こんな時間から帰せるか」

「分かった」

「——環、帰さない。ずっとココに居て。俺の側にいて。環、俺の嫁に来て——」

泣いた。わんわん泣いた。なんで泣いてるのか分かんないくらい泣いた。

指輪もない、ロマンチックなムードもない、さっきまで怒られてた、なのに突然プロポーズされた。

わんわん泣いて泣いて泣いて、あたしは宗二の腕で眠った。

会社で新規に依頼された不動産屋さんのサイトを作っていたら、急に電話がなった。

会社の電話になるのは珍しい。仕事の電話はいつも宗二の携帯に掛かってくるのに。電話に出たら宗二からだった。

「環！ 今すぐ来て。この間話してた会社の社長とアポ取れたから。すっごい急なんだけど、俺らが合わせないと仕事取れない！」

「分かった。今、行く。県庁駅だったよね？」

「そうそう、俺らが前居た会社の近く——」

あたしはデータを保存して、会社を飛出した。宗二に呼ばれたら、あたしは何処へでも行く。

あたし好みの男が、あたしは好みのアースカラーの服を来て、あたしの為に両手を広げる。

漫画みたいでスンバラシイ！

ね、この前買った茶色の服、あれ「チャバネゴキブリみたいだね」って言ったら、宗二はなんて言うかな？

やっぱり黙ったところ。もう着てくれなさそう。

「ママーきて——」

宗二に肩車された息子の友也ともやがあたしを呼ぶ。

「なんだよーめんどくせえーよー」

あたしが動いたら、ピクニックシートがずれるだろーが。

「ほらー環ー 子供が呼んでるから来てやれよ」

「宗二が呼べ」

「ほら、環、こっち来て！」

「はーい」

シートが飛んでいても知らないからね！ 追いかける役目はあんなだ！ 宗二！

<了>

大和撫子と魔性の女

■大和撫子と魔性の女

—— 駅前のケーキ屋に、黒髪美人の売り子が入った。

学校でそんな噂を耳にしてすぐの頃、校門を出たところで鞆から iPod を出してイヤホンを片耳に突っ込んだら、それがピンと引っ張られた。

「今日暇？」

「引っ張んなや、暇ちゃうわボケ」

「バイト？ 何時？」

「十八時」

プランと垂れたイヤホンを手繰り寄せて、耳に突っ込もうとしたら、また引っ張られた。

「うぜえ……引っ張んなって」

「なあ、ちよつと付き合え」

「あ？」

「大和撫子に会いに行こうぜ」

そんな流れで連れて来られた、駅前のケーキ屋。

明らかな個人店でファンシーファンシー。

こんな店、男一人で入れるかよ。二人でも厳しいだろうよ？

自然と目が細くなつていく俺の隣で、挙動不審ながらもショーケースを見て、これどんな味？ なんて売り子の姉ちゃんに聞いている連れの顔を見てゲンナリした。

だらしねえ顔。

ようやく決まったらしい連れが会計する中で、俺は売り子の姉ちゃん顔をチラッと見た。

まあまあ、美人。噂になるだけはあるなと思いながらも目を逸らす。

騙されるな、俺。

黒髪美人が清楚な時代は終わった。大和撫子は死んだ。絶滅した。夢を見るのは止める。

黒髪美人がビッチの可能性の方が、今の御時世高いんだぜ？

小さな箱に入れられたケーキを、小さな手が連れに手渡す。

頭の三角巾から垂らされた前髪が、サラリと揺れてお辞儀した。

「ありがとうございます」

スマイルゼロ円。ニコニコな。えくぼなんかないけど、綺麗に作った笑顔。

隙がない襟の詰まった制服じゃ、胸チラも期待できない。つまんねえの。

「噂通り美人だったな」

「だな。で？ 付き合ってた俺には？」

「シュークリーム一個やるよ」

「はあ？ お前、ケーキ屋行ってシュークリーム二個とかアホちゃう？」

連れはケーキ一個の方が恥ずかしいだの、ケーキは二個買つと高

いから、一番安かったシュークリームを二個買ったんだと言っていた。

「くだらん見栄張ってんなあ」
「うるせーよ」

シューの中にカスタードと生クリーム、酸っぱい苺が入ったシュークリームは、

まあまあな味だった。

売り子もまあまあ。シュークリームもまあまあ。ケーキもまあまあかね？ 食ってないけど。

まあまあなケーキ屋には連れも飽きたのか、二度誘われる事はなかったが、立地が立地だから通学時とバイトの帰りに通る。

朝はシャッターが下りてるが、他はいつも開いている。だからつい中を見てた。

客は居たり居なかったり。売り子の姉ちゃんも居たり居なかったり。

でも姉ちゃんを見かけた時は、いつもニコニコしていた。

学校が終わって駅前を通ったら、ケーキ屋に売り子の姉ちゃんは居なかった。

今日は休みなんだろ。たぶん。

ただそれだけの事。

家までの途中でコンビニに寄って唐揚げ棒買って、食べながら歩いた。まあまあな味。

ゴミが捨てたくて公園に寄った。俺はポイ捨てしない主義。そしたらベンチにケーキ屋の売り子の姉ちゃんが居た。

大きく襟があいた長袖のシャツに、ジーンズ。

ニコニコの二もなく、ただ無表情に携帯の画面を見ていた。携帯の画面を見ながらタバコ吸って、灰を足元にまき散らす。

売り子の姉ちゃんが、ただの姉ちゃんになった。

なあ、姉ちゃん。この公園灰皿ねえのに、そのタバコの吸殻どうすんの？

立ち止まって見ていたら、姉ちゃんは綺麗なパンプスでタバコの火を踏み消して去って行った。

ホラね、大和撫子は絶滅してた。

大和撫子はタバコなんて吸わねえよ。

大和撫子は肩が見えそうな服は着ねえよ。

大和撫子は無愛想じゃねえよ。

姉ちゃんが座っていたベンチの向かいにあったゴミ箱にゴミを投げ捨てて、姉ちゃんが座っていたベンチに腰を下ろした。
ヤニ臭え。足元には少し口紅がついたシケモク。

そっからまだ煙が出ていたから、舌打ちして踏み付けた。
何だろうね。この気持ち。

心のどっかで、絶滅危惧種の大和撫子に会いたかったのかもしれない。

頭じゃ分かったフリをして、崩れた理想にガツカリした。

全部勝手な理想で悪いけど、夢は見るためにあるんだろ？

iPodを出して、こんな時にはどんな選曲したもんかとプレイリストを眺めていたら、目の前に影が落ちた。

顔を上げたら姉ちゃんが居た。

少し走ったのか息が荒い。

「すみません。ここに文庫本ありませんでしたか？」

は？ んなもんあったか？

俺は黙って立ち上がってベンチを見たが、そんなものはない。

「あれ？ おかしいな……」

なんて言いながら、姉ちゃんはベンチの後ろに回る。本なんか読まなさそうな癖に。

「あつた！」

ベンチのケツ乗せる場所と、背もたれとの隙間から後ろに落ちていたらしい文庫本を、姉ちゃんは腰を屈めて拾った。

ブックカバーに包まれた本のタイトルが見えない代わりに、大きくあいた襟からピンクのブラとふんわりした胸が見えた。

やべえ、エロい。

「良かったな。俺も気いつかんとゴメンな」

俺は一ミリたりとも悪くないけど、そう言った。社交辞令な。

「ううん、いいの。ありがとう！」

ぺこりと軽く黒髪を揺らして、左のほっぺにえくぼが浮かんだ。なんだ、こっちが本当のスマイルかよ。

そのまま歩いて行く姉ちゃんを見送って、俺はまたベンチに座っ

た。

今度はヤニの中に、シャンプーの甘い香り。
姉ちゃんのいい匂い。

次の日ケーキ屋を覗いたら、接客中の姉ちゃんと目が合った。そしてそのほっぺにえくぼが浮かんだんだ。

笑顔のただ売りはしませんが、俺に素の顔で笑った
と思ったらヤバイね。

なんかゾクつときた。

まあまあ、のシュークリームでも、今なら二個くらい買ってやって
もいい。

売り子の姉ちゃんは、大和撫子じゃなくて魔性の女。
たぶんこっちは絶滅しない。

脳裏に姉ちゃんのピンクのブラと、ふんわりした胸がチラついた
結果、俺は少し口角を上げて店の前を通り過ぎた。

向かう先はあの公園。

あのえくぼになら、騙されてやってもいいかもしれない。

「タバコ吸うならここで吸えって」

乱れた髪を整える姉ちゃんに、ニヤリと笑いながら言ったら、ほ
っそい眉毛を跳ね上げて驚くから余計に笑える。そんなに驚くこと
か？

「何で分かったの？」

あの日俺が見ていた事に、本気で気がついてないらしいから、黒髪を軽く引っ張って胸の上に姉ちゃんを乗せた。

「彼氏も気付いてないのに」

「そいつがアホなだけ」

ころんと俺の胸から滑り落ちて、姉ちゃんは鞆からタバコとジツポ―を出すと、寝そべりながら火をつけた。

「髪、焦がすなよ……」

髪を片方の肩に寄せてやり、タバコを一本失敬する。

「火」

姉ちゃんが咥えたタバコを寄せるから貰い火して、煙を上に出いた。

ベッドサイドからホテルのロゴが入った灰皿を引き寄せて、姉ちゃんの前に置く。

「あんた高校生でしょ？」

「外で吸うたら誰が見とるか分からないでしょー？」

「悪いガキだね」

姉ちゃんの白い背中をなぞって、耳を軽く噛んで囁く。

「たまに俺と会っ？ 俺の前でなら自分作らないでいーよ？」

「そーする」

しなだれかかった姉ちゃんの髪からヤニと、シャンプーと、汗の匂いがした。

「本——この間落とした本、あれ何？」

「B L」

大和撫子はやっぱり絶滅したらしい。
魔性の女も少し突ついたら素になる。
でも俺はその両方を信じない。

たぶん、俺の大和撫子はどっかに居るし、
たぶん、この姉ちゃんの素は他にもある。

「引いた？」

「いや？ 別にいいんじゃないの？」

男は女の全てを受け入れるフリをするもんだ。

たとえフリだけでも、それがこの姉ちゃんが俺に望んでいることだから。

たぶん、な。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7025t/>

俺は親友の嫁に恋をする

2011年11月30日22時45分発行